早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター
第 1 回「ふくしま浜通り芸術祭」準備・懇談会
議事録

日時：2019 年 5 月 24 日（金）13:00～17:00
場所：福島県広野町ふたば未来学園・みらい劇場
記録：朱鈺、李洸昊

プログラム
司会：小松和真（福島県広野町復興企画課課長）
13:00-13:05　御挨拶：遠藤　智（福島県広野町長）
13:05-13:10　開会挨拶：　松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）
13:10-13:40　森野晋次（アーティスト・アートプロジェクト気流部）
「kiryu-bu～ふくしま浜通り気流部。」
13:40-14:10　山岸清之進（プロジェクト FUKUSHIMA!代表、ディレクター）
「プロジェクト FUKUSHIMA!について」
14:10-14:40　安部　良（建築家、明治大学理工学部兼任講師）
「瀬戸内国際芸術祭での活動と他のプロジェクトの紹介」
14:40-15:00　休憩
15:00-16:50　総合討論
コーディネーター：小松和真（福島県広野町復興企画課課長）
討論者：中嶋聖雄（早稲田大学アジア太平洋研究科教授）
佐々木龍郎（佐々木設計事務所代表取締役）
大手信人（京都大学大学院情報学研究科教授）
16:50-17:00　閉会挨拶:松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）
17:00　終了

【御挨拶】
遠藤　智（福島県広野町長）
本日多くの皆様が未来学園の新校舎に集まっていただき、とても嬉しく思う。今年春に、未来学園中学校が新たに開校され、次世代の未来を創造する場になることが地元から期待されている。今日は浜通り地域の未来への展望も含め、「ふくしま浜通り芸術祭」について活発な議論が展開されることを楽しみにしている。

【開会挨拶】
松岡　俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）
「我々はどこから来たのか、何者か、どこへ行くのか」と題する 19 世紀末のポール・ゴーギャンの名作がある。この 3 つの問いを念頭に置きつつ、2011 年から 8 年間福島に関わってきた。2017 年 5 月に、それまでの研究活動を踏まえ、早稲田大学の浜通り地域における研究拠点として「ふくしま広野未来創造リサーチセンター」を設立した。リサーチセンターはふたば未来学園高校の高校生も含め、世代・分野・地域を超えた「ふくしま学（楽）会」という場を作り、様々な議論を展開してきた。今年 1 月 27

日に開催した第 3 回ふくしま学（楽）会では、2050 年浜通り地域の将来像を示すため、私から「社会イノベーション・イニシアティブ（SI 構想）」を提案した。SI 構想が実現できれば、浜通りは廃炉産業だけに頼らず、自律的で持続可能な地域になる可能性が高いと考えられる。以下の 3 点は、SI 構想の 3 本柱である：

①エネルギー産業遺産・原発事故遺産・震災復興施設のネットワーク
②1F やエネルギー遺産群を核とした「浜通り芸術祭」などの地域アートの開催
③エネルギーと復興を学ぶ体験に農泊・渚泊など組み合わせた広域 DMO の創設

本日の懇談会は、その中の 2 番目の柱という位置付けでセッティングしたものである。地域にとって有意義な芸術祭のあり方について、皆様から常識を打ち破り、理想を追い求め、未知の領域を切り拓くような議論を期待したい。

【報告 1】
森野　晋次（アーティスト、アートプロジェクト気流部代表）
「kiryu-bu～ふくしま浜通り気流部。」

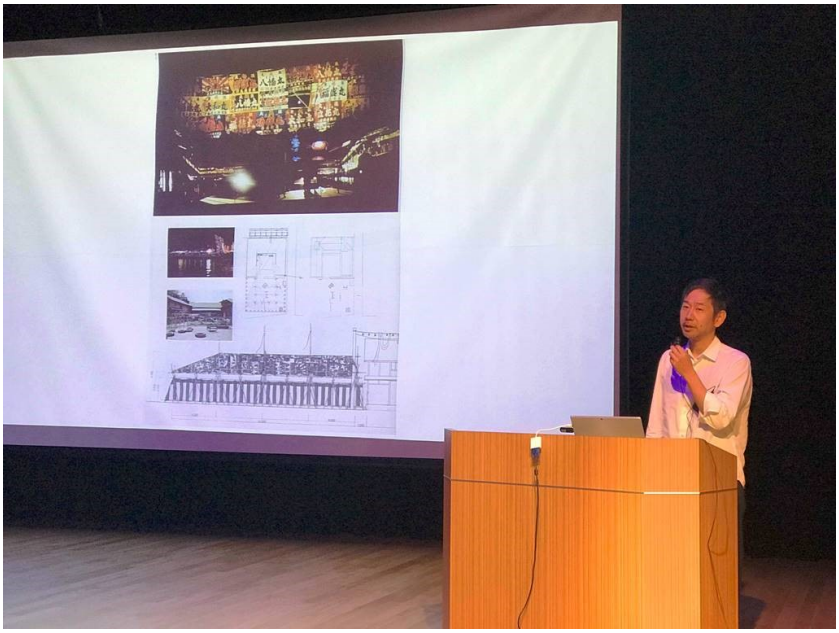
・アート（芸術）とは、術であり、作法であり、人間の営みと共にある。そして、アートプロジェクトとは、従来の「ホワイトキューブ」での作品展示だけでなく、作品制作のプロセスで関係する背景や環境、他者との関係性を表現する芸術活動である。
・アートプロジェクト「気流部」は、「空気」を「場の空気」や雰囲気も含めた広い意味で捉えている。気流部は、アート作品で空気や風の他に、その地域の歴史や地域特性も表現し、つまり「見えないもの」を可視化することである。気流部では、サイトスペシフィック・アート（Site-specific Art）、インスタレーション（Installation art）、ワークショップ、アートイベント等の活動を展開している。
・2015 年の越後妻有大地の芸術祭では、「まつだい里山気流部!!」というアートプロジェクトを実施した。「時の封」という題目で十日町の松代地区の四季の植物を押し葉に制作し、リノベーションした空き家で展示した。この作品の発想はもともと 2011 年の震災後、災害の記憶を風化させず次世代に残すためのものであった。2015 年の越後妻有大地の芸術祭では、十日町の松代地区の美しい四季を可視化する意味で出展した。作品の制作プロセスには、地元住民や海外の農業研修生、観光客も巻き込み、地元小学校で作品制作のワークショップも開催した。
・アーティストと住民とのコミュニケーションの重要さを感じている。気流部の展示場所である空き家のオーナーをはじめ、地元住民は「アート」のことが最初理解できず、受け入れることがなかなか難しかった。アーティストは、住民とコミュニケーションを重ねるうちに、住民からだんだん理解してもらえるようになった。

【報告 2】
山岸清之進（プロジェクト FUKUSHIMA!代表・ディレクター）
「プロジェクト FUKUSHIMA!について」

・プロジェクト FUKUSHIMA!は、2011 年 5 月に大友良英氏（音楽家）、遠藤ミチロウ氏（音楽家、ロックバンド）、和合亮一氏（詩人）の 3 人が代表で発足したアートプロジェクトである。フェスティバルを通して、福島の姿を日本と世界に発信することで、ネガティブに知られた“FUKUSHIMA”の名をポジティブなものに転換していくことを目的としている。2011 年 8 月 15 日に初回の「フェスティバル FUKUSHIMA!」が福島市で開催され、約 13,000 人が集まった。

・プロジェクト FUKUSHIMA!の 3 本柱：
①「フェスティバル FUKUSHIMA!」
－福島大風呂敷：2011 年の初回のフェスティバルでは、全国から募集してきた布を結集し、6,000 m^2 の巨大な風呂敷を会場の芝生の上に敷いて、福島を放射線汚染から守るという決意の象徴である。同時に、祭りの空間づくりの役割も大きいため、他の企画イベントでも大風呂敷を出している。
－福島オーケストラ：参加者による楽器または音を出せるものの一斉即興演奏であった。
－盆踊り：2013 年から「盆踊り」が始まり、現在でも続いている。福島県外や札幌国際芸術祭やあいちトリエンナーレなど複数の芸術祭にも出展し、福島の姿を発信している。
②DOMMUNE FUKUSHIMA!
インタネット放送局 DUMMUNE の福島支局「DOMMUNE FUKUSHIMA!」を立ち上げ、郡山コミュニティ FM とも連携し、プロジェクト FUKUSHIMA!に関する番組を配信している。
③スクール FUKUSHIMA!
学びの場として設定したものであり、アーティストや専門家を招き、市民に向け様々な講座を開いている。
・プロジェクト FUKUSHIMA!は、活動をさらに効果的に推進するために、活動を支えるプラットフォームの組織を作り、2012 年に NPO 法人化した。予算は、助成金、寄付、委託という複数の資金源を活用している。また、2011 年から時間が経つにつれて、プロジェクト FUKUSHIMA!の目標も「福島のありのままの姿を発信する」から「福島から新しい文化を創造する」に更新し、今後人々の関わりをさらに広げていきたいと考えている。

【報告 3】
安部良（建築家、明治大学理工学部兼任講師）
「ふくしま浜通りの可能性について」



・2010 年の瀬戸内国際芸術祭においては産廃問題で知られる豊島の再生というテーマがあった。芸術祭の中で地元住民が主体的に役割を見つけられる場として「島キッチン」を考えた。島キッチンは地元

の婦人たちと東京のシェフと協働でメニューを開発し、食を通して豊島の文化を体験してもらえる場となった。今では、観光客のみならず、地元住民にも利用されており、月に 1 回「島のお誕生会」を開き、誕生日がその月である全ての人を祝っている。島内の全住戸に誕生日会の招待状を配って回ることは高齢者の見守りにもなっている。このような取り組みを通して、島キッチンに対する住民の意識が「建築家の作品→私たちのキッチン→次世代に残したい」というように変化していった。現在、地元住民も参加して定期的に島キッチンの屋根のメンテナンスをしている。

・その他に、広島にある百貨店の屋上を舞台とした「福屋屋上アートプロジェクト」にも関わっている。また東京で実施されている「TURN」という社会的少数者の福祉に注目するアートプロジェクトにも関心を持っている。これらのプロジェクトから、多種多様な人の間のつながりや交流の重要さを感じている。

・2011 年の震災後、福島市においては、避難所の体育館で「こどもの隠れ家」というプロジェクトも実施した。木製の家のフレームを設置し、子どもたちの想像力を大事にすることが目的で、避難中の子どもをそこで自由に遊ばせた。浜通り地域も同じように、子どもの想像力を自由に発揮させる場面を作ることが地域の未来構築には非常に大切だと思う。

【総合討論】

中嶋:今日の 3 本の報告には、3 つの共通トピックがあった。1 つ目は、「地域に貢献するためか、地域の外に発信するためか」の点のバランス、2 つ目は、「多様性を重視するか、明確な方向性（メッセージ性）を重視するか」という点である。今日報告された事例は、地域に根ざしながら外部に発信し、多様性を尊重しながらも共有できる目的を持った活動を展開しており、この 2 つの対立軸をうまく解消できている。3 つ目は、「記憶と忘却」という点だが、私もアーカイブ研究において常に直面する難しい問題である。災害のことを忘れたい・語りたくない人もいるが、その語れない部分を直接的な文字ではなく、アートや建築で表現したのが報告で紹介された事例の成功要因の 1 つであると考えられる。「語りたくない」部分の表現は、浜通り芸術祭の場合でも考える必要がある。

佐々木:交流人口を増やすだけでなく、芸術祭の会期に制限されずに「関係人口」を増やすことも重要である。また、アートやアーティストには、クリエイティブな特性があることから地域の新たな魅力を見出し、発信していくことを期待できる。

大手:学術界では文系と理系の間に共通言葉が少なく、時にコミュニケーションが困難であると感じる。アーティストには、地元住民と同様、コミュニケーションにおいて共通する言葉の創出、使用が求められる。報告者の方々に「持続的な芸術祭」をどう考えるのか、質問したい。

安部:芸術祭を持続させるためには、アーティストや地域住民などの関与から、各アクターに共通するキーワードを見つけることが不可欠である。しかし、瀬戸内国際芸術祭の場合は、最初住民の参加が全くなかったため、その持続性を心配していたが、なぜ今まで続いたのかというと、ボランティアのこえび隊や運営団体のこえびネットワークがアーティストと地元住民との交流や芸術祭の運営にて大きな役割を果たしたからだと思っている。

松岡:なぜ、こえび隊は続いているのか？

安部:詳細はわからないが、多くの人はボランティアを、単純な観光よりも魅力的な、芸術祭への参加

方法の一つと捉えているのではないかと考えられる。

森野:越後妻有大地の芸術祭のこへび隊の場合は、日本人の学生が減少している一方、海外からの学生の参加が多くなった。ボランティアをすることに対して、貴重な体験ができるという観点が強かったと考えられる。

小松:地域の風景や歴史をアートで表現することの話だが、その風景は実際に住民にとって日常的なものであり、どこが魅力なのかを理解できていないことが多い。それについてどう思うか。

森野:確かにそうであるが、しかし、地元住民、あるいは地域外に移住した若者はアートを通して、ふるさとの魅力を再発見することもある。

小松:震災後、ふるさとへの自信を失う人が多くいるが、心の自信を取り戻すための取り組みについてどう思うか。

山岸:近年、日本各地で様々な芸術祭が行われている。その中で、「福島の、浜通り地域でしかできないものは何か」を丁寧に考える必要がある。また、芸術祭を開催するタイミングも重要であり、特に浜通り地域ではそれについて議論しなければならない。

【質疑応答】

中野:豊島住民は観光客に産廃問題の歴史を学んでほしいと考えていたため、瀬戸内国際芸術祭において産廃問題に触れずにアートプロジェクトを実施することに対し、地元住民から反発があった。浜通り地域も震災や原発事故に関する負の記憶を抱えるが、そうした記憶とアートの関係についてどう思うか。

山岸:先ほどの報告で紹介した清山飯坂温泉芸術祭では、美術作家・藤井光さんによる豊島産廃問題を扱った映像作品や、ベトナム人アーティスト、ディン・Q・リーさんによる航空自衛隊百里基地に反対する住民運動を扱った映像作品などを展示し、多くの観客に見てもらって話題になった。つまり、地域課題はその地域だけでなく、別の場所でも人々がその課題に共鳴できる可能性がある。

中嶋:歴史の記録は非常に重要で、それには正確さが求められるのは当然だが、だからと言って、ただ単に記録を残すだけではアーカイブの意味は半減する。その記録をどのように伝えるのか・利活用してもらうのか、という点では、凡庸なアーカイブより、例えば小説や映画のようなフィクションを使ったり、アートによる表現で鑑賞者に積極的に関わってもらったりする方が効果的な場合もある。歴史を正確に記録するのは大切だが、それを多くの人々に伝える・使ってもらうためには、アカデミックなアーカイブだけでなく、多様なかたちのアーカイブの試みがありうるのではないか。今日ご紹介いただいたアートや建築、さまざまなイベントには、単なる学問研究にはない記録・伝承・活用の可能性を感じた。

佐々木:元々はアーカイブが基本施設となる。本来であれば、アーカイブには様々な資料の蓄積があり、そこからアーティストは資料を探し、自分の作品に発展させていくことができる。

森野:「原発事故をテーマとする芸術祭」と最初からテーマを絞ってしまうと、引いてしまう人が多いと考えられる。そのため、一部の作品は原発事故をテーマとしながらも、全体のテーマとしては避けた方が良い。まずは福島の魅力に興味を持ってもらい、より多くの方が訪れる中で、一人でも深く知ってもらうのがいいかもれしれない。

一般参加者 A:浜通り芸術祭をきっかけに、地元住民と外から来た作業員など福島在住の県外出身の人とのつながりができたらいいと思う。それについてはどう思うか。

森野:いわゆる復興ビジネスで県外から来る人は確かに多い。それらの人たちを巻き込んだら、何かおもしろいものができる可能性はある。福島に来てお金のためだけでなく、地元の人とのつながりをさらに生み出せる仕組みができれば良いと考えている。

安部:報告で紹介した TURN プロジュエクトの趣旨は、今の意見と共通すると思う。つまり、プロジェクトは様々な人が共同でパフォーマンスを行う場だけでなく、有用な情報交換の場でもある。それは TURN プロジェクトにおける発達障害の人や体の不自由な人の抱える問題の共有にもつながる。浜通り地域も同じように、芸術祭が多様な人々の情報交換の場になれば、地域課題の解決への貢献になると思う。

一般参加者 B:被災地の浜通り地域において芸術祭を開催するなら状況がより複雑であり、内容もより深い意味を包含するものが求められる。浜通りで芸術祭を実現するには何が必要なのか。

森野:芸術祭を支える組織が必要である。例えば、瀬戸内国際芸術祭を支える NPO 法人こえびネットワークと越後妻有大地の芸術祭を運営する NPO 法人越後妻有里山協力機構を挙げることができる。これらの組織は、ボランティアのこえび隊・こへび隊をマネジメントし、地元住民とアーティストとの交流を促している。つまり、このような地元で広いネットワークを持つ組織は、芸術祭の実現には非常に重要なものである。

一般参加者 B:また、福島のことを学際的に研究することも重要であると思う。

小松:地元でアートに対する受容度は、温度差がかなりあると考えられる。自分の越後妻有大地の芸術祭での経験から言うと、芸術祭は実際に芸術だけでなく、その地域の歴史や文化も含んでいる。外部の人の評価によって、地域の人々がありふれた地元の魅力を再認識することができ、地元に対する自信感も回復できると思う。

根本:浜通り地域における帰還人口の年齢構成が高齢化している。高齢化が進む中の地域活性化に対してどういう提案があるのか。

安部:福島と同様に高齢化が進んでいる豊島で実施した福祉財産に関する調査の結果によれば、豊島住民にとって一番価値のある財産は「学校」であった。この結果からも、中学校・小学校を通う次世代の未来が、豊島住民にとって一番大切にしたいものであるということが読み取れる。

松本:芸術祭の目的が曖昧であると思う。また、浜通り地域が原発事故とどう関わるのか分からない。

森野:プロデューサー・住民・行政の 3 者が議論した上で、芸術祭の目的を設定する方がいいと思う。また、どういう予算で実施するのかについてのことも考慮する必要がある。

安部:全国で開催されている多くの芸術祭でも国からの補助金がないと続けられない現状がある。補助金に頼らずに持続できる活動のあり方が課題である。

【閉会挨拶】
松岡:福島復興を長期・広域的に考えることが、大学の存在価値であり、社会的責任である。ふくしま広野 RC は、世代・地域・分野を超えた場づくりを通じて、社会イノベーションを創り出す新しい知識やアイディアの形成を図っている。本日の懇談会もその取り組みの 1 つであり、今日の議論の結果を踏まえ、次のステップに踏み込んでいきたい。福島が単なる「課題先進地域」ではなく、「課題解決の先進地域」になれたら、日本全国の地域社会の再生モデルになると考える。

以上

（最終作成：2019 年 6 月 9 日）